

論文の内容の要旨

論文題目 「大日本帝国」における初等教科書の図像の歴史的研究

—地理、歴史教科書を中心に—

氏名 韓炫精

本研究は、「大日本帝国」下で1900年代から1940年代にかけて刊行された初等教科書の中に、「大日本帝国」がいかにかに表象されていたのかを明らかにするものである。とりわけ、教科書に描かれた図像を主な手がかりとして、その内容と表現技法の歴史の変遷に焦点を当てる。

本研究では、教科書に載せられた図像を、「大日本帝国」を視覚的に構築するための知識を伝えるメディアとして位置づける。従来の教科書研究は、教科別に本文内容を中心に扱ってきたが、本研究は教科を貫いて知識を伝えるメディアとしての教科書の図像に注目した。図像は、視聴覚教育分野と図画教育分野に限定されたかたちで、写真、幻灯機、掛図などテクノロジーに焦点を当てて研究が積み重ねられてきた。そうした中では、知識伝達のメディアとして図像が取り上げられたことは皆無であった。しかしながら、M.ミッチェルはイメージを、それを見る側の解釈領域として重視した。彼の主張に基づくと、教科書の図像は、「大日本帝国」を伝える方法であり、読者である児童が「大日本帝国」を実体として能動的に構築していくメディアとして位置づく。このことは、図像を利用する教材一般に通じる、視覚による政治と教育内容との問題にかかわるものであり、教育内容の文章のみを対象としていては見落とされてしまう、教育における権力関係や政治的意図の生成を明らかにさせるものである。

次に本研究の構成を記しておこう。

序章では、国民国家形成に資する印刷メディアとしてとらえられた教科書研究の枠組みや教育権力によって内地と外地で異なる教育内容の提示と統合への試みを明らかにした。さらに、植民地教科書研究を踏まえて、本研究の課題を、「大日本帝国」の認識が教育によって構築される問題であるととらえ直した上で、文部省教科書と植民地教科書の比較分析を課題と設定した。

本研究は、世界表象の基準を、空間の広がりや時間のつながりに分けた上で、それに対応する科目として第一部では地理教科書、第二部では歴史教科書を取り上げ二部構成とした。各部では、共通して教科書における帝国表象の通史的变化と帝国表象における宗主国と植民地の地政学的

差を考察した。

第一部の「地理を見る」では、地理教科書における帝国が、全体の領域及び各地域の表象を通じてどのような空間として提示されたか、また、帝国空間の表象に内地と植民地の間に差がないかを検討した。

第一章では、地図を通して領土の境界や空間を科学的に分割し統合する認識の形成が行われたことを考察した。帝国領土の境界を示した地図は、1910年代に科学的測量、つまり緯度・経度や高度の規準を以て当時の領土を説明した。一方、1920年半ば以降は、領土のみならず海へ関心が向けられ、海上に国境を引く領域表現が登場した。一旦確定された領土は、1930年代末になると、交通図へ分化して、帝国構成員の移動にかかるコストによって表現される均質な空間意識を形成した。

第二章では、写真を通して帝国空間に対する文化的区別や統合の技法を分析した。

地理教科書における各地域の写真は、初期に帝国内部を生産と消費の空間として写した。煙突や尖塔の垂直性で表現され、社会の進化や発展を象徴するもので特徴づけた。戦時期教科書に普及された自然風景は、風景の実写を超えて、それが見る側の心象地理を呼び起こす象徴的機能を果たし、帝国空間を均質化した。地理教科書において山が表象として使われたのは1930年代である。1930年代には個別の山が自然の代表として強調される。さらに、外地教科書には富士山およびピクチュアレスクは、像主を帝国の代表的自然として表現し、帝国内に遍在する日常風景として外地の児童に享受されることで帝国の自然への均質的まなざしを与えた。1930年代末を軸に地理教科書の図像で示された帝国は、産業や進歩の空間認識を高めながらも、自然を通じて統合的に認識される空間として求められた。

第三章では、統計を通して帝国空間における植民地認識の差を比較した。

第一、地理教科書における人種・民族表象は、文部省の地理教科書のみで使用された。教科書において帝国構成員を人種別に陳列する仕方は、当時の博覧会が駆使した帝国主義のまなざしを含めていた。1910-1920年代の外面的特徴を写す人種・民族図像は、1930-1940年代には生活者として少数民族を描いた。戦中期の地理教科書に、少数民族は帝国構成員として徐々に強調され、帝国空間の広さや多様性を示す対象になった。一方、帝国構成員の多数を占める「大和民族」は、教科書に直接現れることはなかったが、戦時期においては帝国の境界で新たな人種、民族と共に初めて写られ、揺れ動く帝国空間の認識を表した。つまり、人種・民族図像は、帝国の構成員をただ陳列するより、それが新たに編入される地域を予告する形で、帝国空間の拡張意識を持たせた。第二、地理教科書において統計図表は各地域を関連付ける機能をした。植民地教科書の統計図表に現れた植民地は、文部省教科書に比べて自地域を過度に強調することで、帝国空間の中で新たに序列づけられた空間であった。一方、文部省の地理教科書では

1930年代末に内地と外地を意識的に区分し始め、帝国空間を社会的位階の中で示した。

第二部の「歴史を見る」では、歴史教科書を対象に、帝国の時間的永久性や共通の記憶がどのように認識可能になったかを明らかにした。

第四章では、文部省と植民地歴史教科書における時間表象の特徴を検討した。第一、文部省歴史教科書における起源の場所図像、系統図、天皇の肖像が、万世一系の時間意識を直線的かつ植民地においても同時代的に構成したことを述べた。一方、植民地・占領地歴史教科書では、文部省と同様の場所図像、系統図、天皇の肖像が使われつつ、該当地域で発掘された遺物図像を使用して、実物の形の観察と時間意識をつなげ新たな起源認識の領域を設けた。起源の場所として唯一であった伊勢神宮は、1940年代になると他の神宮群の出現により、古い時間を根拠づける場所になった。

第五章では、歴史教科書における近代記述の視覚的側面を取り上げて、帝国の共通記憶の形成について述べた。近代の国家儀礼は天皇家を中心に描かれ、近代の時間を鮮明にしようとした。特に、1930年代に制作された記念歴史画は、明治以降の時間を強調する機能を持って文部省と植民地の近代本文に広く掲載された。これは、1930年代に歴史認識における視覚の重要性と大きくかかわる。また、文部省教科書に比べて植民地・占領地歴史教科書では、1930年代から天皇家の実写的図像が積極的に使用されたが、権力者の身体の写真は植民地と内地の時間的連関性を形象化した。

第六章では、歴史教科書における戦争図像を対象に、記録の時代別、地域別差が異なる記憶を構築してきたことを考察した。

第一、戦争描写の内容である。まず、元寇は、外勢の表れの代表的出来事で、その記録が戦いの場から、戦争地図、戦跡図像、スペクタクルの戦争画まで展開し、敵の存在を無化する方向で描かれた。一方、当時において帝国下にあった朝鮮と台湾とかかわる過去の出来事は二重の意味を持って視覚化された。つまり、「台湾征伐・平定」の場合、日本軍による抵抗の鎮圧の場面から熊久親王のいる場面へ変わり、出来事に対する記憶を帝国中心に集約した。また、「文禄の役」の場合、文部省では戦争の主体なる武士の図像を、朝鮮総督府では戦績の図像を使い、異なる記録で異なる記憶を形成した。第二、戦争描写の形式である。当代的戦争である日中戦争や太平洋戦争は、鳥瞰的技法や荒いタッチの単画で、戦争の光景や緊迫さを演出し、その表現を見る側が戦争の在り方を想起するように描かれた。

終章では、本論の整理を通じて、教科書本文から読み取れる教育内容に従属するものとして扱われてきた教科書図像が独自の意図をもって使用されていたこと、教科書図像の変遷、図像の意図を探ることによって、「大日本帝国」を構成していた権力関係や政治的意図の教育における生成

過程を明らかにしてきたことを論証した。

とりわけ浮かび上がってきたのは、「帝国認識」の同一性と同時に地政学的差異が文章よりも図像において明確に表されていることである。教科書改訂に伴う図像の変更が、帝国像の中身を情勢に沿って調節しようとした教育権力の意図の反映であることを明らかにした。また、内地／外地という場所の違いを地理・歴史という文化的な分節によって裁断する過程は、帝国を実体として認識する強力な装置であることが指摘できる。

さらに、本研究の特色として以下の点があげられる。すなわち、本研究では比較の視点を植民地と内地の関係のみでなく、植民地・占領地間にもおくことで、帝国認識の多様性と亀裂を明らかにしたことである。これは、従来の植民地教科書研究が文部省教科書との比較のみに留まり、支配イデオロギーを批判的にとらえてきたことと比して新たな示唆である。

本研究の課題として、本研究は教科書による帝国の時間と空間の表象に限られていたが、ここから得られた見地を深めるために、同時代における他の印刷メディアとの比較、児童向けの図像をめぐる議論などを検討して、そこに含まれる帝国認識の専有及び政治性を考察することを設定した。